静岡新聞

令和2年(2020年)7月7日(火曜日)

水枯れ経験「不安分かる」

山梨のリニア沿線住民 着工拒否に理解

JR東海がリニア中央新幹線東京・品川―名古屋間の2027年開業の事実上延期を表明する要因となった、静岡県による南アルプストンネル工事着工拒否を巡り、山梨リニア実験線沿線で工事中に生活用水の水枯れを経験した地域の住民は「大井川の流量減少を懸念する静岡県の主張は実感を持って理解できる」と言う。山梨県笛吹市内の沿線では小規模集落の簡易水道などが枯渇し、代替水源の確保までの間、神経をすり減らした。「もし大井川が枯渇すれば、静岡県民への影響は私たちの比ではない」。JR側が地元の懸念に真剣に対応する必要性を訴える。

トンネルの掘削工事の影響で水の流れがなくなった沢。奥は山梨リニア実験線＝山梨県笛吹市御坂町

「『大井川の水がなくなったら困る』という静岡県の主張は実感を持って理解できる」。笛吹市御坂町上黒駒の坂本龍也さん(68)は南アルプスのトンネル工事(静岡工区、8・9キロ)を巡るニュースに関心を寄せてきた。

坂本さんが暮らす同所の戸倉区は、山梨リニア実験線沿線近くに位置する。実験線の工事が進む09年7月ごろ、簡易水道の水源としていた3カ所の沢が突然枯渇し、10月には地区を流れる達沢川の流れも止まった。

住民は「リニアの工事が原因では」と疑い、当時戸倉区長だった坂本さんは、建設主体の独立行政法人「鉄道建設・運輸施設整備支援機構」に、市を通じて水源の確保を要請。機構は当初「因果関係が分からない」と対応を保留したが、数カ月後に代替水源を確保すると約束した。

その間、生活用水が少なくなった戸倉区の17世帯の住民は簡易水道の貯水タンクに残る水で急場をしのいだが住民は「いつ代替水源が確保できるのか」と不安を抱いた。機構は実験線の工事前に戸倉区の住民に説明会を開いたが、坂本さんは「水枯れへの言及はなかった」と振り返り、突然の水源枯渇に「住民は皆、戸惑った」と言う。

山梨県内ではリニア実験線の工事に関連した河川や地下水の水枯れが、笛吹市御坂町や上野原市秋山などで発生。住民は生活・農業用水が確保できなくなり、建設主体が代替水源の確保などの対応をした。

実験線の試験走行を経て、JR東海は営業線開業に向けて工事に着手。だが、静岡県内の南アルプストンネルを巡り、県は地表を流れる大井川が下流域の生活・経済を支えることを踏まえて流量確保を求める一方、JRは「工事期間中に他県に流出する水は技術的に戻せない」と後になって説明。両者の溝が埋まらず、JRが3日、開業の延期を事実上表明した。

坂本さんは戸倉区での経験を踏まえ「世帯数が少ないわれわれの地区でさえ大変な思いをしたが、もし大井川で渇水が起きたら影響は甚大」と指摘。「JR東海は丁寧に影響を説明し、被害があった場合は迅速に補償すべきだ」と真摯(しんし)な対応を求めた。

(山梨日日新聞)